

# 山々に囲まれた生活

匹見町の遺跡に見る縄文の暮らしと祈り

## 紙祖川のあじこで……

紙祖川がたくさんの土砂を運んで作った平地（河岸段丘）が広がる美濃郡匹見町から、多くの縄文時代の遺跡が発見されました。中国山地のような山間地では、こうした大きな川の周辺に発達した段丘が、縄文人の格好の生活の場だったのです。紙祖川流域にある石ヶ坪遺跡は、今からおよそ四七〇〇〜三〇〇〇年前の遺跡であり、そこからは漁、狩り、採集を支えられた当時の生活を知らせてくれる手がかりとなる、石器や土器が数多く出土しました。山間部である石ヶ坪に住んでいた縄文時代の人たちは、いったいどのような暮らしをしていたのでしょうか。その暮らしのざらざら想像してみましょう。



紙祖川が作り上げた河岸段丘には、石ヶ坪遺跡をはじめ、水田ノ上、ヨレといった遺跡が点在している。



食料として保存されていたトチの実（匹見町・ヨレ遺跡出土）

石ヶ坪遺跡から見つかった住居跡

石製の矢じり（匹見町・石ヶ坪遺跡出土）

石製のきり（匹見町・イセ遺跡出土）

ナイフとして用いられた石さじ（匹見町・ヨレ遺跡出土）

木の実などをつぶすのに使った磨石と石皿（ともに匹見町・石ヶ坪遺跡出土）

魚を捕るのに使った石製のおもり（匹見町・石ヶ坪遺跡出土）

## ある日の石ヶ坪

とある秋の日のこと。石ヶ坪のムラには女、子供が総出で近くの雑木林の中にはいり、木の実集めに熱中していた。キヤアキヤアという笑い声が響く中、クリ、ドングリ、トチの実とその他多くの木の実がムラに持ち帰られた。冬の蓄えとすため、その多くは土中の穴に保存

されることになる。残った木の実にはアク抜きをし、すりつぶしたあと、焼いてクツキなどにされた。

男たちはといて、イヌを連れ山に狩りに行ったきり、一日も戻ってこない。優れた運動能力と鋭敏な神経を持った縄文の狩人たちをもってしても、なかなか獲物が手にはいらなるときもあるらしい。

そんなとき、ある一団がイノシシをかついで山を下りてきた。ひと足先にイヌが吠えながらムラに走りこんでくる。子供たちが歓声をあげながら男たちの一団を出迎えた。どうやら男たちが作った落とし穴に落ちていたイノシシらしい。さっそく石さじを取り出され、解体が始まった。ムラびと六〇人前後を養うにはいささか少ない収穫だが、じきに多くの獲物を抱えて他の男たちが山を下りてくるはずである。

冬を前に、食糧集めに忙しいムラびとたちであるが、平素はしづくのんびりと生活している。夏は紙祖川に集まってくる魚をムラびと総出で網に追い込めば、マス、サケなどの魚が大量に手にはいる。春、夏、秋と山にはいり、草木の根、野草を集める。ここは食べ物に恵まれた、天然の食糧倉庫なのだ。

山と川に囲まれた縄文時代の石ヶ坪。ここに住むムラびとたちは、現代人の想像以上に、豊かでのんびりとした生活を送っていたに違いない。



縄文時代の石ヶ坪遺跡の様子（想像図）